

# 福岡・井相田C遺跡



(福岡)  
井相田C  
発掘調査は、中学校建設工事に伴って、井相田C遺跡第二次調査として実施された。その結果、奈良時代後期～平安時代前期の集落

- 1 所在地 福岡市博多区井相田
- 2 調査期間 一九八六年(昭61)七月～一九八七年二月
- 3 発掘機関 福岡市教育委員会
- 4 調査担当者 横山邦継・瀧本正志
- 5 遺跡の種類 集落跡・水田跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代後期～平安時代前期、室町時代後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

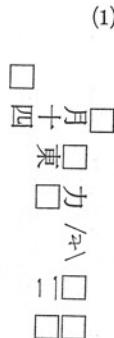
井相田C遺跡は、福岡平野東部を北流する御笠川中流域西岸に広がる標高一二mの微高地に位置する。『倭名類聚抄』によると、本

遺跡は那珂郡中嶋郷に属していたと考えられ、調査地から南東方向七kmには大宰府政府跡が所在する。

井戸SE〇一二は、直径三mの円形の掘形を持ち、井戸底中央に方形の井戸枠(内法八〇cm×一m)が据え付けられている。井戸枠は、枠溝を有する柱に板を横位状に差し込んで作られている。墨書土器は全て須恵器で、蓋の内面と杯の底部外面とに「徳」「遠賀」「良」の文字が墨書されている。墨書土器は、当調査地に南接する第一次調査においても二八点(内一点は人面墨書土器)出土している。

池SG一六は、東西三三m・南北一八mを測る楕円形を呈している。池の底は、西半部が一段低くなり、三・五mの深さを測る。

8 木簡の釈文・内容



(118×28×1) 081

跡と、室町時代後期の水田跡を検出した。集落跡は、掘立柱建物・竪穴式住居・井戸・溝からなり、井戸SE〇二から木簡三点と墨書き器七点が出土した。また、室町時代後期の水田跡は、水田・池・大溝からなり、池SG一六から柿経など約一七〇〇点を数える墨書き器が出土した。

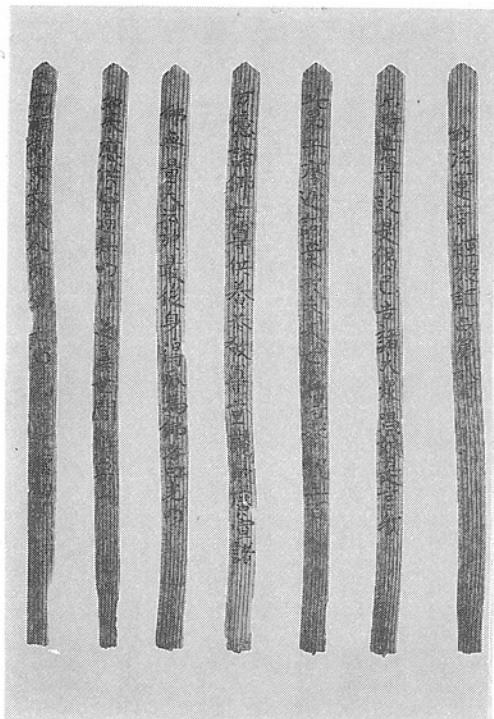
1986年出土の木簡

は片面の一部に残り他は削られている。

がセを境として逆になつてゐる。木簡(2)は、左右・上下とも欠損し、形状は不明である。残存する部分は五つに割れている。墨書は片面に残るが、一部は削られている。文書木簡と考えられ、「丸マ」「額田マ」等の氏名、人名と思われる「押勝」が書かれている。また、「五人」「四人」などの人数が数ヶ所に書かれている点は注目されよう。木簡(3)は、左右・上下とも欠損し、形状は不明である。墨書は片面に残り他は削られている。

木簡(1)は、左右・上下とも欠損し、形状は不明である。残存する

正方形もしくはそれに近い特異な形の板に墨書きしたものと思われる池から出土した約一七〇〇点の墨書き木札類は、九点の卒塔婆の外は全て柿経である。卒塔婆の多くは五輪塔形をなし、その中央部には木釘が残る。卒塔婆の内二点に「長禄參年」(一四五九)と「寛正



卒塔婆

五年」（一四六四）の紀年銘が認められた。

柿経は、頭部を圭頭状にした長さ二七cm・三五cm、幅一・四cm、二cm、厚さ〇・三mm～一mmの薄板に法華經を分割して写経したものである。法華經以外の經文は認められない。今回出土した柿経は、以前に各地で出土した柿経と同様に、一二〇枚を一単位とし、板の両面に經文を墨書きした例が多くを占める。また、經文は一七文字、偈文は一六文字をそれぞれ両面に墨書きしているが、卷頭・卷末部分では字数の関係からか片面のみに墨書きしている。柿経に写経した法華經は、卷一の序品第一から卷八の普賢菩薩勸發品第二八までの各品の經文が認められる。

以上のように、一次・二次調査における多くの木簡・墨書き土器・製塙土器の出土は、調査で検出した掘立柱建物群の性格が、公的施設であることを強く示すものであろう。

なお、本木簡・墨書き木札類の釈読にあたり、九州歴史資料館倉住靖彦、奈良国立文化財研究所加藤優の両氏に御教示いただいた。

## 9 参考文献

福岡市教育委員会『井相田C遺跡第二次調査現地説明会資料』（一九八六年）

同『井相田C遺跡I』（福岡市埋蔵文化財調査報告書 第一五二集一 一九八七年）

（滝本正志）

# 木 簡 研 究 第六号

卷頭言——記紀批判と木簡——

直木孝次郎

一九八三年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏餉屋下層遺構 藤原宮跡 長岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 水走遺跡 津堂遺跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺遺跡 沢田宮遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡 宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大萱遺跡 篠脇遺跡 北稻付遺跡 鯉沼東II遺跡 下野国府跡 多賀城跡 一乘谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作国府跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡

一九七七年以前出土の木簡（六）

平城宮跡（第三二次）

平安時代の日記にみえる木簡

日本古代の人口について

稟報

『木簡研究』一～五号総目次

頒価 三五〇〇円 □四〇〇円

山田 英雄  
鎌田 元一